

小児歯科医として行う I 期治療について考える  
～ I 期で完結した例とそうでない症例から～

小児期から歯ならびの治療、管理をするのに、小児歯科医としてどのように行うのか、皆様それぞれに考え方があると思います。小児歯科専門医である以上、いわゆる I 期治療の比重は高くなると思いますが、患児と保護者にとって、どのような基準で歯ならび治療、管理を行うのが良いだろうと、未だに考えることがあります。

今回は私の行った I 期治療内で完結し、数年予後経過も行えている 1 例と、折角の機会ですので、I 期では終わらず II 期治療に移行し、比較的難儀をした 1 例についても提示いたします。当然、反省点のある内容と思いますが、その 2 例を今回の話題提供の元とさせていただき、少人数で畏まらずぎっくばらんにご参加された先生方と、とても学会などではできないお話ができれば幸いに思います。

よろしく願いいたします。

症例 1) I 期のみ

犬歯萌出余地は無い

管理開始

第二大臼歯嵌合時

さらに 2 年後



第一大臼歯と犬歯関係は I 級、正中改善がみられ予後も良好

症例 2) I 期+II 期

前歯が気になる

I 期治療でアライメント

II 期治療進行中だが・・・



II 期治療からの開始が妥当であったのか、しかしやはり I 期から行いたい

話題提供：鬼頭秀明（愛知県名古屋市）